ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.9 September 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

・巻頭言
海外布教の中でぢばを考える③
／永尾 教昭 1

・「おさしづ」語句の探求（48）
「おさしづ」第7巻における個人の身上・事情の伺いと「道」
／澤井 治郎 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（3）
台湾の族群と歴史の複雑性
／山西 弘朗 3

・日本語教育と海外伝道（38）
日本語教育と異文化伝道③
／大内 泰夫 4

・宗教伝統における聖典の意味構造（8）
シャンカラ派におけるヴェーダ聖典とその伝承
／澤井 義次 5

・イスラームから見た世界（15）
イスラームにおける「他者への献身」②―自発的喜捨（サダカ）―
／澤井 真 6

・コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（39）
民主化への動き
／森 洋明 7

・現代宗教と女性（33）
オリンピックと筋肉的キリスト教
／金子 珠理 8

・ニューヨーク通信（10）
コロナ禍における活動
／福井 陽一 9

・図書紹介（124）
島薗進・鎌田東二・佐久間庸和著『グリーフケアの時代―「喪失の悲しみ」に寄り添う―』
／金子 昭 10

・おやさと研究所ニュース 11

天理台湾学会第30回研究大会、オンラインで開催／第3回 East Asian Society for the Scientific Study of Religion (EASSSR：宗教の科学的研究のための東アジア学会）で発表／第341回研究報告会／2021年度公開教学講座のご案内

巻頭言

海外布教の中でぢばを考える③

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

天理教の場合、例えば教会の設立、教会長の交代、教会祭典日の変更等々は、まず教会本部に願書が提出される。しかし事務的に願書や関連書類を提出すれば済むのではなく、教会の代表者らが実際にぢばに足を運ぶ必要がある。そして、ぢばで真柱による「事情運び」を経て初めて許認可される。

そもそも天理教の教会は、教団が教勢の進展を図って戦略的、組織的に各地に設置したというよりは、信者たちが設立したいと本部に願い出て、それを神（存命の教祖）が許可するという順序を辿ってきている。つまり教会は神に許されて設立されたのであるから、教会長の変更等々を人間が勝手にすることができるとは考えないのである。こうした意味で、教団の運営に携わる本部とぢばとは不離一体が理想ということになるのであるが、それは、教会の設立・教会名や会長の交代、神殿や附属屋に関わる「願」の可否は神の裁可によるという信仰があるからだろう。

一方で、例えば仏教でいう本山と末寺の関係は、言わば商業界でいう本社と支社になぞらえることができるだろう。銀行で融資を頼む際、そのオーソライズは本社がするにしても、融資金を受けるのは金額にもよるが近くの支店で事足りる。そもそも支店とは、わざわざ本社に行かなくても済むように、顧客の便宜を図るために置かれるものだ。

末寺であっても同様だろう。本山に行かなくても、同じ宗派ならどの寺でも、信者はいわば同様のサービスを受けることができる。事実、例えばインターネットで「得度したい」と検索すれば、本山だけではなく多くの寺院がその広告を出している。カトリックも同様で、わざわざバチカンに行かなくても洗礼は世界中のどこの教会でも受けられる。

天理教の教祖自身、立教以前、浄土宗の信者として五重相伝を受けているが、それも総本山の知恩院ではなく近在の寺で受けている。五重相伝とは秘儀とされているが「浄土宗の教えを受容したものが、人間の中でも勝れた人という栄誉があるとして戒名にいわゆる『誉』号を許される」ものというから、教理の奥義を究めるものなのだろう。[1] そういう高度なものでも末寺で授かることができる。

しかし、天理教の場合、一般信者がようぼくになるための別席の受講、さづけの拝戴はもとより、お守り、安産の許しである「をびや許し」の拝受など、ぢばでしかなされない。一般教会ではできないのだ。そもそもお守りに至っては、正確には「証拠守り」と言われ、ぢばに帰参した証拠に渡されるものである。

加えて信者が信仰的成人の道程を歩んでいくのにも、ぢば、言い換えれば本部に足を運ばねばならない。ようぼくから「教人」と呼ばれ、また教会長資格を有する立場になるために「事情運び」はないが（つまり教理上、これは人間が作った制度と言えるかもしれない）、そのための講習会や試験も本部でのみなされる。

こういった形は、通常、布教戦略上非常に不利なように考えられなくもない。つまり、わざわざぢばに帰参しなくても各地に存在する教会で信者は信仰の段階を踏んでいける、あるいはお守りなども教会でもらえるといった方が教線が伸びていくのに好都合のように見えなくもない。教会自体も何かの手続きのたびにぢばに帰参し、神の許しを受けねばならないのは非合理的にも思える。しかし現実には、天理教の教勢は、明治時代にすでに朝鮮半島にまで延びている。終戦まで日本の最北端であった南樺太には最盛期で実に55カ所の教会の設置を見ているのである。[2] 他の教団を凌駕する勢いであった。

そして、海外布教の上でこれをしっかりと捉えていくということは重要なポイントとなる。

［註］

（1）若林隆光『わが家の宗教　浄土宗』大法輪閣、2003年。

（2）『第14回天理教統計年鑑』1946年、天理教教務庁調査課。